

<巻頭言>

キャラクターIPを活用したオープンアクセスジャーナル創刊による 学術コミュニケーション促進の試み

Operation to Make Academic Exchange a Less Strenuous Task and Requirement through Open access journal Making use of character IP (Operation MAELSTROM)

木下翔太郎*

Shotaro Kinoshita

筆者は、バンダイナムコグループが推進するガンダムのIP（キャラクターなどの知的財産）を活用した「ガンダムプロジェクト」のうち、サステナブルをテーマにしたプロジェクトの一つである「ガンダムオープンイノベーション」（GOI）にパートナーとして参加している[‡]。その活動の一環として、他のGOI参加パートナーと協力し、『地球・宇宙・未来』（英名、「Globe, Universe, Next future, Discussions And Mentions」）をこの度創刊することとした。関係者各位のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。以下に、創刊の経緯とその趣旨について述べる。

筆者は、科学技術と社会の関係、先端技術のELSI（倫理的・法的・社会的課題：Ethical, Legal and Social Issues）に関心をもつ研究者であり、このような分野への社会的関心や市民参加が低いことに問題意識をもっていた。そうした中で、ガンダムIPのもつ発信力を活用することが有用と考え、GOIに応募した。ガンダムシリーズは、1979年のアニメ『機動戦士ガンダム』の放送開始から2024年で45周年を迎え、アニメ・映画・プラモデルなど多岐にわたるコンテンツの展開により、世代を越えて認知されている[§]。また、ガンダムシリーズでは、人類がスペースコロニーを建造し宇宙に居住している未来や、国家同士の戦争における兵器としてロボット（モビルスーツ）が描かれるなど、科学や現実性に依拠する姿勢をみせている。これらの点から、先端技術のELSIについて考える際のきっかけ作りや題材としてガンダムIPが有用であると筆者は考えた。実際、筆者らがGOIに参加する企業関係者・大学教員など37名に対し行ったアンケート調査では、「ガンダムシリーズのどのような強みがGOIで活かされるか（複数回答可）」という多肢選択形式の設問で、「熱心なファンが多い」：25（67.6%）、「作品世界に登場する科学技術の設定がリアルである」：23（62.2%）、「作品世界が、未来の人間社会の姿をリアルに描いて

* 慶應義塾大学医学部ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座

† 東京大学大学院学際情報学府

‡ 採択プラン名「ガンダムIPを活用したELSI議論の活性化プロジェクト（Activation project of ELSI discussion Using GUNDAM IP：A.E.U.G.）」

§ 例えば、キャラクターに紐づく累積収入ランキング（2018年まで）では、「Gundam（機動戦士ガンダム）」は世界13位である。また、世界のTOP25にランクインする10の日本発コンテンツのうち、漫画・ゲームでなくアニメを原作とする作品は同作品のみである。（内閣官房新しい資本主義実現会議（第26回）基礎資料（2024年4月）https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/atarashii_sihonsyugi/kaigi/dai26/gijisidai.html）

いる」: 22(59.5%)の順に回答が多かった**。

その後、GOIでの研究・実践活動を進める中で、成果の発表先の選定が課題となった。活動の趣旨を踏まえ、「双方向的なコミュニケーションができる余地がある」、「カジュアルすぎず、統一された様式がある」などの要件が必要と考えられた。これらの条件を満たすものとして、和文学術雑誌への投稿を検討したが、「学際的な内容も含む幅広い学問領域をカバーしている」、「誰でも投稿・閲覧ができる」、「実践報告や研究紹介など様々な形式で投稿できる」、「各種学術データベースでの検索対象である」、「電子ジャーナルの形態を有し適切な公開・保存が期待される」、などの筆者らの求める条件を満たす投稿先を見つけることができなかつた^{††}。そこで、これらの条件をクリアする新しい学術雑誌を創刊するという発想に至った。本誌はJ-STAGE 登載により、過去記事のアーカイブ化、各種学術データベース上での検索も可能となる見込みである。さらに、ガンダム IP の活用により、アウトリーチの拡大や、話題性の向上などの点で、既存の雑誌にはない魅力を有する投稿先となることを目指している。

なお、和文学術雑誌を取り巻く環境は年々厳しいものとなっている。当然ながら日本語で書かれた論文は、国外の研究者からは閲覧・引用されにくい。そのため、大学ランキングや個人の研究評価において「論文の被引用回数」が重視される近年では、研究者は英語で論文を書くことをより求められるようになってきている。また、和文論文を研究業績としてカウントしない分野も多くなっており、理系分野の一部では和文学術雑誌自体の不要論も出てきている¹⁾。他方で、日本語で論文を発表すれば、国内の読者は増え、一般市民、実務者なども含む幅広い人々がアクセス可能となることは間違いない。また、国外から関心をもたれにくいテーマ、非日本語圏の研究者が内容を正確に評価することが困難な研究^{‡‡}、学術的評価よりも社会への警鐘・市民の理解促進が優先される報告など、和文論文が優先されるケースもあるだろう。昨今、非英語圏の研究者は、このような学術的評価と地域貢献とのバランスに悩まされている²⁾。本誌は、後者の地域貢献の文脈に重点を置き、様々な立場からの問題意識を共有し、分野を超えた連携・協力のきっかけの場を作ることを目的としている。学術雑誌におけるキャラクターIP の活用など、筆者らも初めての試みが多く至らぬ点もあると思われるが、広く皆様よりご指導、ご鞭撻をお願いしたい。

文献

1. 戸ヶ里泰典. (2022). 和文誌の価値と使命を再考する. *日本健康教育学会誌*, 30(3), 205-206.
2. Wang, S., Kinoshita, S., & Yokoyama, H. M. (2024). Write your paper on the motherland?. *Accountability in Research*, 1-3.

** 京都大学宇宙総合学ユニット第16回シンポジウム(2023年2月)ほかで発表済。現在論文化中。

†† 東京大学文学部・人文系研究科の学生・院生が中心となって創刊された『人文×社会』(Online ISSN: 2436-3928)は筆者らの求める条件を概ね満たしていたが、惜しくも2022年12月より休刊となっている。同誌はJ-STAGEから過去の論文が閲覧可能であり、本誌を創刊する上で大いに参考となった。

‡‡ 筆者は以前、富野由悠季氏によるガンダムのノベライズが、オリジナルアニメ作品の監督・原作者が自ら大人向けに作品世界を広げる初めての試みであったことなどを整理した論考を英語で執筆し、国外の学術雑誌に投稿したことがある(不採択。再投稿先を検討中)。同論考で参照した文献は、現在入手困難な日本語の書籍が多く、国外の研究者が論考の内容の正確性を評価するのは困難であった可能性がある。